

私は存在するーほっといてくれー

ピエール・ノット

キャバレー



はじめに

ル・ポールは、リー・フー・メシカ、そしてリュドヴィック・ミシエルの熱意の結晶である。

レ・デシャルジュールのリー・フー・メシカ、そして、エルブ・トンドル・プロダクションのリュドヴィック・ミシエルは、レ・デシャルジュール劇場を運営、また独創的な芸術企画を発展させるため、2000年9月より連携し、事業を推進している。

そして、2007年10月、エルブ・トンドル・プロダクションは、ル・ポールとゆう名の、数々の部局で構成される共同組織となった。この共同組織は、芸術的企画の実現、及び文化経済学に応える事を目的としている。

最新企画/業績

ル・ポール“クリエーション”：『アプロンティサージュ』ジャン-リュック・ラガース
ル・ポール“ディストリビューション”：『ペティート』/『井戸』/『pmbトリオ』/
『スウィフト』/『アプロンティサージュ』/『私は存在する(ほっといてくれ)』再上演
ロン・ボワン劇場

ル・ポール“メディア”：レ・デシャルジュール、コメディ・フランセーズ及び、その3つのホールの為の、紙媒体におけるロゴ、グラフィック憲章、デジタル、インターネット整備。同様に、ウェブサイトの改訂、及びインターネットショップの創設
ル・ポール“アソシエーション”：パリ・メトロポール・プログラムの一環として、サーセル市(パリ郊外)に団体支部を創設し、パリ、サーセル、そしてアビニョン間の文化交流、また、社会に文化を融合させることを目指す
ル・ポール“チケット予約”：チケット販売電話受付開設。劇場での電子チケット販売のソフトウェア創設

私は存在する(ほっといてくれ)

ピエール・ノット 作詞・作曲
ポール・マリイ・バルビエ 編曲(アレンジ)

ピエール・ノット、マリイ・ノット 出演
ポール・マリイ・バルビエ 伴奏

クリスチャン・ガスク 衣装
ステファン・バケ 照明
クレモン・ポワソン 音声

レ・デシャルジュール / ル・ポール
リー・フー・メシカ、リュドヴィック・ミシエル 制作

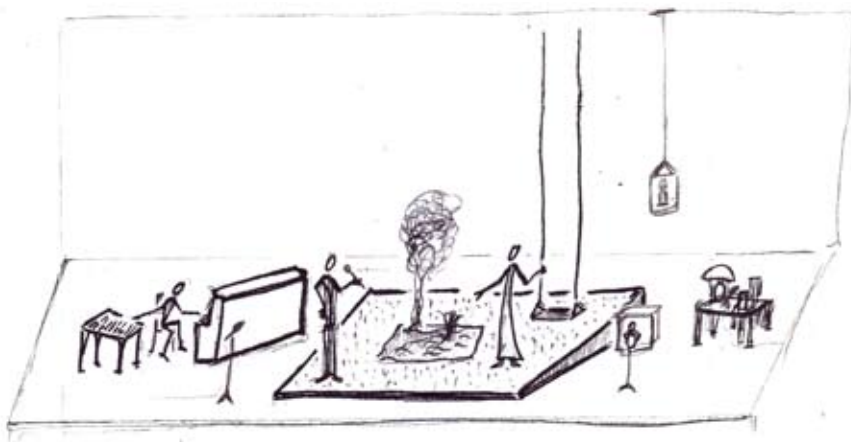


30曲の唄を通して、「私は存在する(ほっといてくれ)」のトリオは、地上での居場所を見つけようと試みる。他人の中の誰かになる。ピアノと、ちょっとした憂鬱と、たくさんのほろりとさせるおどけ芝居の中で。この3人は、災難の中にこしらえ、ゲーテやデュラスの亡霊達に囲まれながら、青々とした芝生の上で、彼たちの流儀でダンスを踊る。

あらすじ

誰にもならないよりは、むしろ、誰かに。星のなかのアイドル、腐葉土の下の死骸、若しくは、アスファルトの上の娼婦。他人の中の誰か(でも、誰に?)になって、他人の愛と憎しみの狭間で、まっすぐで居続ける。ヴェニスで死すために。

ピエール・ノット作の唄を、この風変わりで通過儀礼的な道のりを、自身が演出、マリイ・ノットと共に出演、ポール＝マリイ・バルビエが編曲、及び、ピアノ、ビブラフォン、ギターにより伴奏を行う。7つのステップの中に、30の唄、おならの音が鳴るクッションと庭の小人、自分の名前を持つこと、そして自分の人生を生きることには価値があると気付いた少女。誰にもならないのであれば、むしろ誰かになる事の試みの災難の上で、この3人は、ばかげていて、そして生き生きとした楽しいロンドを舞う。「ハンマーで作られた芝居」と評されている。



スペクタクル (紹介)

ピエール・ノット

作家、作曲家、演出家、俳優



1969年フランス、アミアンに生まれる。17歳で高校中退。劇団を設立。

シュニッツラーの『輪舞(ロンド)』、及び自身の脚本による『ヴィクトールのママン』(1992年、リジー-シュル-オルク演劇祭審査員特別賞受賞)、『木々の前のアリスの憂鬱』をクリシーのロゲ財団劇場、17区のヨーロッパ、10区のエトワール劇場にて上演。ノット企画、出演の、プレヴェール作『麒麟たちのオペラ』を公演した劇団一座とともに、一時、ポー近郊に住む。その後、リド・ミュージックの夜間店員、次にヴァージン・メガストアの商品発送係、更には、クリシーのボジョン病院の遊戯施設の指導員まで、7年にわたり務めた。その際、演劇のアトリエを子供たちと運営し、彼らと多くの共同演劇、その中のひとつである、『この世は悲しいことではない』などを創作した。

ノットは、3編の写真入り詩集、そして2編の小説、『ロザンフェルト夫人の唄』(ED.NADEAU 1993)、『未解決の夜』(ED.LORIS TALMART 1998)の著者である。そして、1990年代前半より劇作を始め、特に、アレスのフェスティバルで、エヴリン・イストリアとマガリ・マニュによって朗読された『エルミュの指』を、また、ロン・ポワン劇場において、『ジャーナリストたち』が、ディディエ・ロング指揮のもと、ピエール・リシャール、ロジェ・ミレモン、ジャン＝ピエール・カルフォン、ジャン＝クロード・ドファン、ナタリー・セルダ出演で発表された。『クレモンズ、我が腕に』は、キャトル・ヴォンシリーズの中のラヴォン・セヌ誌に発表され、2002年のアビニョン演劇祭において、ジャック・ゴンブランによって朗読された。そして、2003年、国立文学センターより、戯曲のための奨学金を受ける。ル・ボカルのイベントでは、2005年に創られた『タルコフスキー、これが中国だ』が、パリ市庁舎のホールにおいてムスタファ・アウアー出演で上演された。2005年より、フランス・キュルチュール(ラジオ番組)のために、ジャン＝クロード・ドファン、ローレンス・ロワ、ドゥニ・ラヴォン、エヴリン・ディディ、マリナ・ゴロヴィン、ジェローム・キルシェー等によって演じられた、『それは、彼が去ったということ』、『暗い先駆者』(テレビドラマ)、『ジェルトウリュドウの状況』、『いがみ合い』、そして、『窓からか否か』、を執筆した。

ボーマルシェ協会の援助で、演劇、『私もカトリーヌ・ドヌーブ』(2005年、ディアヌ、リュシアン・バリエール財団演劇賞受賞)は、2005年8月、ペピニエール劇場で、ジャン＝クロード・コティヤール演出で初演され、私的劇場での、モリエール賞2006を受賞し、ノットは、最優秀作家に選出された。またこの演目は、東京、ローマ、ソフィアでも上演され、また、『SACD演劇新人』賞を受賞している。『ジャーナリストたち』の改訂版、『小さく粗野な社交家』(キャトル・ヴォンシリーズ、ラヴォン・セヌ誌)が、2007年1月、トリスタン・ベルナル劇場において、ジャン＝クロード・コティヤール演出、ソフィ・アーチュール、ザジ・デレム出演によって上演されている。

ノットは、2006年8月下旬に、レ・デシャルジュールで初演されたキャバレー『私は存在する(ほっといてくれ)』を、創作、作曲、演出し、妹であるマリイ・ノットと共に上演した。このキャバレーは、カレン・ロケ、ポール・マリイ・バルビエ、ダビッド・マクアーによっても上演される。また、ノット兄妹による歌のリサイタルが、東京、シアターX(シアターカイ)において、2007年3月下旬、『私もカトリーヌ・ドヌーブ』の日本初上演の際に、約10日間開催された。2007年2月イタリア、ローマでは、ウノ劇場において、レザ・ケラドマン演出で、『私もカトリーヌ・ドヌーブ』が初演され、2008年及び2009年に再演される。また、この演目は、2009年2月、ブルガリア、ソフィアにおいても、ウラジミール・ペトコフ演出で、初演される。またこの作品は、ボルドーのポン・トゥールノン劇場にて、ラビラントウ劇団により、ジェラルム・ダビッド演出のもと2008年2月に初演され、2009年3月に再演、そしてそれに続き、ピエール・ノット、マリイ・ノット、及びポール・マリイ・バルビエ出演によるリサイタルが開かれる。

2007年夏、ADAMI及びSACDの援助のもと、演劇祭オフ作品として、アビニョン、ウル劇場において、エマニュエル・ブジュロル演出の『背中のナイフ』を上演。

2008年3月、ノットの作品『北をめざす二人のおばさん』が、パリ、ペピニエール劇場において、パトリック・ケルブラ演出で、クリスティヌ・ミュリオ、カトリーヌ・サルヴィア出演で上演された。この作品は、ドイツ語、ロシア語、そして日本語に訳

... / ...

ピエール・ノット

... /.

され、2009年、ベルギーにおいても上演される。2008年5月、やなせまちこをピアノ伴奏に迎え、マリイ・ノットと東京、シアターX(シアターカイ)で、自身作、作曲、演出、出演のショートミュージカル『泥の中 泥の中』を初演した。2008年11月、東京、銀座の劇場で、『背中のナイフー口の翼』を上演。

また『ジェラルール・フィリップへの愛のゆえに』は、両国のシアターX(シアターカイ)にてフランス語版が、作者自身監督で上演され、2009年春には、日本語版が初演される。引き続き、東京で、『ジェラルール・フィリップを讃えて』と題されたリサイタルを、2009年4月にマリイ・ノット及び、やなせまちこと共に、上演する。また、アンヌ＝ロー・リエジヨワの求めに応じて、モンリュソンのCDN、イベント、“フェディヴェール・ア・エリソン”に参加、作品、『そして狼の上のこども』の冒頭部分を執筆。この作品は、2009年3月、モンリュソンのCDNにて、アンヌ＝ロー・リエジヨワ演出で上演予定。また、レ・デシャルジュール劇場は、6本もの多くの戯曲を届けてくれるピエール・ノットを招聘し、『家族』をテーマとしたシーズン2009、2010を表現する。ピエール・ノット演出の『背中のナイフー口の翼』、ピエール・ノット脚本『家族のキャバレー』、マリイ・ノット作、ピエール・ノット監修の『キャバレーノティヤン』、ピエール・ノット創作による子供向け演劇、『ビデュル、トリュック』、ウラジミール・ペトコフ演出ブルガリア語演劇、フランス語字幕の『私もカトリーヌ・ドヌーブ』、同様に、ヴィリー・シャティヨンのサン＝ルイ、サン＝クレモン高校の生徒たちに上演の機会を与え、また、ロン・ポワン劇場『オール・レ・ミュール』において、新バージョンの『私は存在する(ほっといてくれ)』が、ピエール、マリイ・ノット出演、ポール＝マリイ・バルビエ伴奏により上演される。

記者として、1994年より、雑誌、ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール、レヴェヌモン・ドゥ・ジュディ、パリーフォト、ラ・テラス、エポック、アール・ドゥ・ラ・ピストなどに寄稿、そして、テアトルでは、編集長補佐を勤めた後、編集長に就任、そして、2004年から2005年に、新しいスタイルを発案、指揮した。また、アビニョン演劇祭、ブルジュの文化センター、シャイヨー国立劇場、そしてナンシー製作劇場など、いくつかの組織のシーズンパンフレットの文章も執筆した。

芸術主任としては、作家会館の提案により、特に、ヴィリーエ＝シュル＝マルヌ中学のエクリチュール・アトリエを指揮。また、2005年、アビニョン演劇祭においては、演劇国立センターによる、著作、批評の分析評論の主任。1998年からは、ヴィリー＝シャティヨンの、サン＝ルイ、サン＝クレモン高校の芸術主幹に就任。アンヴォル・ドゥ・ヴィリー劇場において、ノットが顧問を務める演劇部の生徒たちが、最終年に、『デカラージュ』(1999)、『シャックス・カット』(2000)、『パンドラ・モートル』(2001)、『もしも母さんがモンスターだったら』(2003)、『軽蔑(より良く)』(2004)、などを上演した。2005年春、パリのバスティーユの劇場で、生徒らが、彼らのために書かれた作品『背中のナイフ』を公演。2006年5月、バスティーユの劇場、ついで、ヴィリー・シャティヨンのアンヴォル劇場において、『窓からか否か』を公演。同様に、2007年には、バスティーユ、そして、ヴィリーで、『怒り』の名で、ラヴォン・セヌ誌の“七つの大罪”特集に掲載された、『ぼくの家(ぼくは偶然に拳銃自殺したんじゃない)』を上演した。2008年、アンヴォル、レ・デシャルジュール劇場、バスティーユ劇場において、また、2009年4月に東京、シアターXにおいて、東京フランス大使館の支援で、生徒たちのために書かれた『ジェラルール・フィリップへの愛のゆえに』を上演。引き続き、2009年5月、バスティーユと、ヴィリー・シャティヨンの劇場で、『そして、狼の上のこども』が上演される。

ピエール・ノットは、SACDのボーマルシェ協会、フランス＝キュルチュールの原稿下読み部門の委員、ペリギュのミモスフェスティバル、アネスの劇作品大賞の審査員に選ばれた。2006年より、芸術文学章シュヴァリエの受章者で、2008年9月より、文献国立センター委員会の一員である。そして、コメディ＝フランセーズ支配人、ミュリエル・マエットの依頼により、2006年秋、コメディ＝フランセーズの事務局長に任命された。

マリイ・ノット 俳優



1979年生まれ。6歳の頃より、兄であるピエール・ノットの作品を歌う。1994年、ヨーロッパ劇場において、『アリスの憂鬱をテーマとした変奏曲』の中の《通りすがりの女の子》を演じ、エトワール劇場において、兄作のミュージカル、キャバレー『むしろ赤いピロード』に出演。また、サモヴァール・ドゥ・バニョレにおいて上演の、『あなたにキスを』で、フランク・ディネと共演し、ロン・ポワン劇場の《世界で最も偉大な芝居》の一環として発表された『私もカトリーヌ・ドヌーブ』の草案の一部で、マリイ役を演じる。

18歳の時に、高校を中退、幼稚園の指導員、受付係、企画係、保安員、B級映画の吹き替えなどを経て、7年前から劇場のチケット販売、現在は、アトリエの劇場のカウンターに勤務している。2003年に、作家、演出家のダビッド・ノワールの依頼を受け、ラ・ヴィ・エ・クートゥ社に参加。2003、2004年には、ディエップの国立舞台、ルーアンのドゥ・リヴ、そして、コロンブのユプロのフェスティバルオブ作品『無邪気な人々』に出演。また、セルジーのテアトル95のロン・ポワンにおいて上演の『テール!』にも出演した。

2005年、“クリシーの若き才能フェスティバル”において、自身作、演出の、5人の登場人物を描いた寸劇、『駅』を発表。また、ヤン・アブラムのワンマンショーの脚本執筆でもコラボレーションし、2005年11月、2006年6月、パリのエスパス・サン・トノレにおいて、演出、上演した。そして、マルク・ヴィラル原作、イザベル・マティック監督作品、短編映画『リーニュ・ドゥ・ヴィ』(2006年上映)に出演。現在、マリイは、演出家、ソニア・コダンのもと、ジャム・ガルネ脚本の『カティ・オルソンの生と死』を稽古中。また、自身脚本の芝居、『駅』を、クリシーのフェスティバルにおいて演出。そして、2008年10月のフェスティバル、ヴィル・オリゾンタル・ヴィル・ヴェルティカルで、『ヨミガエリ』を、レ・デシャルジュール劇場のシーズン/2009・2010年では、ピエール・ノット招聘の一環として、2010年2月に、自身執筆、ピエール・ノット監修のノットのキャバレーが上演される。

ポール・マリイ ・バルビエ

編曲家
音楽家



5歳よりピアノを始め、10歳で、およそ10年後にピアノ、パーカッション、管楽器など、音楽科の複数の修了証書を手に卒業することとなる、ヴァンヌのコンセルヴァトワールに入学。コンセルヴァトワールの教師たちの勧めから、卒業後はパリに移り、9区のコンセルヴァトワール、次いでパリのCNRに入学。フィリップ・マセに師事し、ジャズ、特にビブラフォンを学ぶ。2002年、ジャンゴ・レインハルトを知るきっかけを作ることになる、ギタリストであり、作曲家のピエール・コンロ・バレと、重要な出会いをはたす。また、ピエール・カムロ・バレは、フランク・ウィンターシュタインとクロード・ムトンと結成しているトリオの舞台にも、ポール・マリイを起用している。ポール・マリイは、早い時期から演劇の世界に通じ、2003年、アムソン社とともに、ファブリス・メルキオ作の『KIDS』(ミュージカル)で、パリ・ジュヌ・タラン賞(パリ市支援体制)を獲得。2003年、ポール・マリイは、2006年にモリエール賞、最優秀演劇賞を獲得する『私もカトリーヌ・ドヌーブ』の作者であるピエール・ノットと知り合う。ポール・マリイは、ノットのために、コメディ・ミュージカルの編曲を行い、また、ピエールとマリイ・ノットと共に、2006年9月にレ・デシャルジュール劇場で、『私は存在する(ほっといてくれ)』を再演する。平行して、コンロカルテット、そして、ロドルフ・ラファリ、最近では、エルヴェ・プリカン、エルヴェ・ルジェ、そしてフレッド・ロワゾーと共にジブシージャズを続けている。また、コラン・オザヌとヴァルテール・スミス・プロジェクトとは、エレクトロミュージックを携えて、シャ・ノワール、ベルヴィロワズ、そして、フレッシュ・ドールで演奏を行う。2007年3月には、ポール・マリイは、ジャズのトリオPMBトリオを、ギターのパエール・コンロ・バレ、コントラバスのマチュー・ブロッシュと結成し、CDシーズン1は、パリのスタジオ、ラブルで、録音された。この録音に引き続き、トリオは、ツアーのためにアラブへ赴き、数日間、ドーハ、ドバイ、アブ・ダビ、マスカテに滞在した。2008年3月より、PMBトリオは、レ・デシャルジュールに所属。現在、PMBトリオは、コントラバスのマチュー・ブロッシュはそのままに、新しくギターにローレン・ギエ、また、ドラムにダビッド・ジョージュレを迎えて編成している。2009年2月には、ニューアルバムグッバイ・ヘッジホッグをリリースし、パリのロントウルポとサンセットで、コンサートが開かれる。

クリスチャン・ガスク

衣装

2006年トロフィー受賞:衣装、服飾国際映画祭

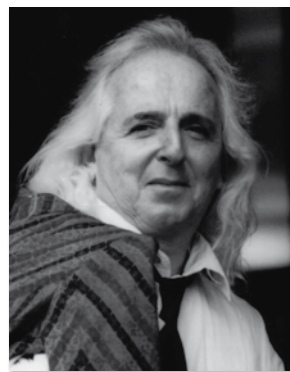
2003年モリエール賞受賞:パレロワイヤル劇場

オスカー・ワイルド『ウィンダミア卿夫人の扇』

1998年セザール:P.ドゥ・ブロカ、『せむし』

1997年セザール:P.ルコント、『リディキュール』

1996年セザール:F.ミッテラン、『喋々夫人』



クリスチャン・ガスクは、オペラ同様、演劇作品のためにも、国際的な大舞台で活躍している。ガスクは、ジャン・バティスト・サストル、ダビッドおよびフレデリコ・アラニャ、ブノワ・ジャクオ、アンドレ・テシネ、ベアトロン・ブリエ、パトリス・ルコントなどのような、数々の演出家、監督などに同行している。

最近では、映画作品、B.ジャクオの『ベスのガスパール』、『トスカ』、『サド』、A.テシネの『迷子』、『ランデブー』、『ブロンテ姉妹』、『バロコ』、『フランスでの思い出』、P.ルコントの『喜びの道』、『サン・ピエールの未亡人』、B.ブリエの『私の男』、『ほおひげ』、B.タヴェルニエの、『ダディ・ノスタルジ』などを手がける。オペラでは、ジャン＝ルイ・グランダ演出の『マリウス』で定期的にロベルト・アラニャと、モンペリエ国立オペラでは、フランコ・アルファノ作、ダビッドおよびフレデリコ・アラニャ演出の『シラノ・ドゥ・ベルジュラック』、プッチーニ作、アンヌ・デレン演出の『マノン・レスコー』を東京文化会館で、ジョナタン・ミレー演出の同作品を、ミラノのスカラで、そして、その他の作品のためにも衣装を手がけ、シャトレ劇場で、イザベル・パルティオ演出の『ピーターパン』、ワロニー国立オペラで、R.ワグナーの『リング』を手がけた。

近年、劇場では、テアトル14で、ジャン・コクトーの『美しきつれない人』、G.フェイドの、『イタリアのむぎわら帽子』の衣装を手がけた。シャイヨー国立劇場では、ゲオルグ・ブシュネーの『レオンスとレナ』、マリヴォーの『愛の驚き』をシャイヨー国立劇場で、そしてオスカー・ワイルドの『ウィンダミア卿夫人の扇』を、XIV劇場、ブフ・パリジャン、及びパレ・ロワイヤル劇場(2003年モリエール賞)で上演、衣装を手がけた。

《才能、それは、魔力のようなものだ。本当のところ、何が原因なのか、我々には知る由もない。クリスチャン・ガスクは類稀な才に長けている。(そしてまさしく魅力的でもある)。

ただ私は、どのように、そしてなぜなのかとゆう明確さをもって、それを定義付ける事に、非常に戸惑っている。なぜなら、彼は数多のはぎれの中から生まれたからなのか?なぜなら彼は、独創的かつ慎重な、彩色家だからなのか?なぜなら、かれはユーモアがあるからなのか?なぜなら彼は、教養があるからなのか?なぜなら彼は、決して不可能を口にしないからなのか?なぜなら彼は、細部まで正確なセンスを持っているからなのか?なぜなら彼は、気前が良いからなのか?なぜなら彼は、はじめのアイデアに、絶対に満足しないからなのか?なぜなら彼の狂喜は、決して気取っていないからなのか?なぜなら彼は、白ワインが好きだからなのか?

いや、もちろん、その全てなのだろう。そして、それ以外の、もっとたくさんのもとも。いくつの映画に、オペラに、芝居に、服を着せてきたのだろうか。40?60?

100?多分それ以上。。たまに彼の疲れた顔を見ることがあっても、無感動でいるところを見たことがない。本物の芸術家の特性は、長年変わらない情熱を持って自身の仕事を愛し、それを発揮することを知ることだ。》

パトリス・ルコント

脚本抜粋

(2008年12月6日版)



Catherine D.

彼女:なんなの、このジャン-リュック・ゴダール
風でたらめは!

Je fume

彼女:8時20分

今朝私は、死のこと、そして、髪を切るこ
とを考えていたのよ
でもいつ?
一日は、なんて短いの

La Petite tombe

彼:小さな墓

ぼくたち、たったふたりのためだけの
この墓石と、そして青い鉄の十字架
ふたつの、空を指し示す美しい十字架
そして、君の髪にちりばめられたタンポポ
恋人たちの天国

Que voulez-vous?

ファニー・アルドンの声《この場所は、大切な愛
のための場所。もしも、あなたが愛よりも権力を
重要視するのならば、あなたは死んでいるのよ
(...)》

Love is boolshit

彼女:だから愛は、くだらない誤解にすぎない。
決して解決することのない...

記事抜粋

Télérama

巧みな着想と、目まぐるしい面白さに沸き立つ
ディヴェルティメント
ジョスカ・シドロウ

FIGARO
SCOPE

それは思い、スイングする
完全に調子外れで、時に烈しく、
滑稽で、笑いをさそうショーは、率直で心に触れる
ジャン-ルイ・ピント

Le Parisien

見事なピエール・ノット: 昨年の私的劇場での
モリエール賞受賞『私もカトリーヌ・ドヌーブ』の後、
彼は、『私は存在する(ほっといてくれ)』を携えて、
デシャルジュールで、再開する
マリイ-エマニュエル・ガルフレ

Obs

惑わせる、恐るべき子どもたちのキャバレー
ジャック・ネルソン

Les Echos

2000年代を読み解くために、
唄う鉛筆の筆跡の中の、夢見がちな皮肉屋、
ピエール・ノットについて行こう
ジル・コスタ

Valeurs

我々は、キャバレーにいるのか、
それとも、ジャン・コクトーの“恐るべき子どもたち”、
ポールとエリザベットの部屋にいるのか?
ジャック・ネルソン

pariscope

ハーモニーの中のように、
うわごとの中で一致する二重奏は、
実に見事に機能する
マリイ・セリーヌ・ニヴィエール

用語集

1.アヴィニョン演劇祭：毎年ヴァカンスシーズンに、南フランスのアヴィニョンで開かれる演劇祭。「イン」および「オフ」と呼ばれる二つの組織が、たがいに独立に並立している。1947年、俳優で演出家のジャン・ヴィラル(Jean Vilar)により創始。

2.Centre National des Lettres：1973年に創設された、フランス人著者、フランス文学を支援、奨励する組織。

3. ボーマルシェ協会：フランス文学の奨励と、創作活動を支援する財団。

4.ディアヌ、ルシアン・バリエール劇場賞：演劇、映画、文学の現代作品を奨励するために、ディアヌ、ルシアン・バリエール財団よりおこなわれる賞。

5.モリエール賞：17世紀に活躍したフランスの劇作家モリエール(Moliere)からその名をとる、1987年に創設されたフランスの演劇賞。

6.S.A.C.D.：著者、劇作家協会。

7.ADAMI：国内外を問わず、著作権保護のために活動する組織。

8.コメディ・フランセーズ：フランスを代表する、王立、後に国立の劇団。1680年創立の、現存する世界最古の劇団のひとつ。

9.ロン・ポワン劇場：1839年創立の、パリの劇場。シャンゼリゼ付近に位置する。現代作品の脚本家による作品を発表する。

10.セザール賞：フランスにおける映画賞。1975年にジョルジュ・クラヴァンヌ(Georges Cravenne)によって設立。毎年2月に、前年に公開された映画の中から選ばれる。

11.パトリス・ルコント：フランス、パリ出身の映画監督、脚本家。代表作に、『仕立て屋の恋』『髪結いの亭主』『タンゴ』『リディキュール』『ぼくの大変な友達』など。

12.CDN：公共の劇場に相当する。フランスには33箇所存在し、劇場のディレクターは、文化省によって選出される。

レ・デシヤルジュール / ル・ポール 制作作品

演劇

- ・『アブロンティサージュ』ジャン・リュック・ラガース作、シルヴァン・モリス演出ーレ・デシヤルジュール、ブザンソン・フランシュ・コンテCDN共同制作ーパリー2008年、2009年
- ・『私の骨とバラバス』ベナマル・シバ作、出演、リュドヴィック・ミシェル演出ーレ・デシヤルジュールー2005年、2006年
- ・『S.t.t.t.d.』マリイ・シャブレ作、パスカル・ゼルセール演出ーパリ、ルナール劇場ー2004年
- ・『温度計の夜』ディアステム作、演出ーマリニー劇場2003年モリエール賞ノミネーション / 最優秀女優賞 エマ・ド・コース、最優秀男優賞 フレデリック・アンドロー / ーパリー2003年
- ・『ペピーノ』ブリューノ・リチ作、出演、マリオ・ゴンザレス演出ーレ・デシヤルジュールー2003年
- ・『マリイ・アンジュ』ベアトラン・ブリエ原作“ワルツを踊る人”、アレクサンドラ・ダディエ演出ーレ・デシヤルジュール、パリー2003年
- ・『ペピーノ』ブリューノ・リチ作、出演、マリオ・ゴンザレス演出ーシャトーヴァロン演劇センター / ナンシー、ボワレルホールー2002年
- ・『温度計の夜』ーディアステム作、演出ーニース国立演劇センターー2001年
- ・『マリナ・ツヴェタエヴァの夜』ーヴァレリア・モレッティ作、ミカエル・ロンスダル演出ーサン・ルイ島劇場ーパリー2001年
- ・『スタバット・マトウール』ーアントニオ・タランティーノ作、リュドヴィック・ミシェル演出ーレ・デシヤルジュール、パリー2000年

ミュージカル

- ・『私は存在する(ほっといてくれ)』、ピエール・ノット作詞、作曲、編曲、演出ーレ・デシヤルジュールーパリー2006年
- ・『ジャックと魔法の豆』ジョルジュ・デュブユイ作詞、フィリップ・マンカ作曲、オスカー演出ートラディショナルバージョンートンブールーパリー2006年
- ・『ミス・ナイフ、オリヴィエ・ピを唄う』オリヴィエ・ピ作詞、ジャン・イヴ・リヴォ作曲、オリヴィエ・ピ、ミス・ナイフ出演、ジャン・イヴ・リヴォ / ピアノ、ジュリアン・ジョリー / ドラム、マチュー・ダル / コントラバスーカフェ・ド・ラ・ダンス、パリー2005年
- 巡業：フェスティバル・アビニオン・イン(市立劇場)、ル・スカラベ / サン・カンタン劇場(国立劇場)、カーン劇場(国立劇場) ヴァロンス劇場(国立演劇センター)
- ・『アレックス・ボバン』ーレ・デシヤルジュール、パリー2005年
- ・『ディアステム』コンサートーレ・デシヤルジュール、パリー2005年
- ・『ジャックと魔法の豆』ジョルジュ・デュブユイ作詞、フィリップ・マンカ作曲、オスカー演出ーコンサートバージョンーカジノ・パリー2005年
- ・『ジャックと魔法の豆』ジョルジュ・デュブユイ作詞、フィリップ・マンカ作曲、ーナレーションバージョンーレ・デシヤルジュール、パリー2004年、2005年

CD

ミュージックアルバム

- ・『私は存在する(ほっといてくれ)』、ピエール・ノット作詞、作曲、編曲ーパリー2009年ーニューバージョン
- ・『私は存在する(ほっといてくれ)』、ピエール・ノット作詞、作曲、編曲ーパリー2006年
- ・『ジャックと魔法の豆』ジョルジュ・デュブユイ作詞、フィリップ・マンカ作曲、アントワヌ・ド・コヌ ナレーターーパリ2004年
- ・『レ・イノサンティヌ』ルネ・ド・オバルディア作詞、ジェラルム・カルヴィ作曲、エディション・メトロポリテ提携ーパリ2002年

DVD

- ・『私は存在する(ほっといてくれ)』、ピエール・ノット作詞、作曲、編曲、演出、マリイ・ノット、ピエール・ノット、ポール・マリイ・バルビエ(ピアノ、ギター、ビブラフォン)出演ーロン・ボワン劇場ーパリ、コンサート撮影 / レ・デシヤルジュール、パリ
- ・『ミス・ナイフ、オリヴィエ・ピを唄う』オリヴィエ・ピ作詞、ジャン・イヴ・リヴォ作曲、オリヴィエ・ピ、ミス・ナイフ出演、ジャン・イヴ・リヴォ / ピアノ、ジュリアン・ジョリー / ドラム、マチュー・ダル / コントラバスー カフェ・ド・ラ・ダンス、ピンクTV提携ーパリー2005年
- ・『温度計の夜』ディアステム作、演出、エマ・ド・コース、フレデリック・アンドロー出演、アラマゴルドフィルム、スペクタクル、パリ・ブルミエ提携ーパリー2003年

シーズン2009年、2010年 初演 / 再演

- ・『背中のナイフ』ピエール・ノット作、演出
マリイ・ノット、カロリーヌ・マルシェッティ、フラビー・フォンテーヌ、マノン・ユーゲル、ジェニファー・デッカーーレ・デシヤルジュール / ピエール・ノット、レジデンス企画 /レ・デシヤルジュール 2009年8月18日～10月24日 ピエール・ノットに当てられたレジデンス企画ーパリ
- ・『私は存在する(ほっといてくれ)』、ピエール・ノット作詞、作曲、編曲、演出、マリイ・ノット、ピエール・ノット、ポール・マリイ・バルビエ(ピアノ、ギター、ビブラフォン)出演ーロン・ボワン劇場2009年10月20～11月21日ピエール・ノットに当てられたレジデンス企画ーパリ
- ・『初恋』サミュエル・バケット作、アラン・マセ出演、エルベ・ピエール監修ーコメディ・フランセーズ準座員ーレ・デシヤルジュール2009年11月5日よりーパリ
- ・『ビデュル、トリュック』ピエール・ノット作、シルヴァン・モリス演出、配役未定ーレ・デシヤルジュール2009年4月(日程未定)、ピエール・ノット企画ーパリ
- ・『ドラモレット』(仮題)トマ・ベルナル作、シルヴァン・モリス演出、アラン・マセ、アルノ・ル・カルボンティエ、他出演ーレ・デシヤルジュールーシーズン2009、2010年ーパリ
- シーズン2010年、2011年 初演 / 再演
- ・『アリアス ウィズ ア ツイスト』バジル・ツイスト作、ジョイの6体のマリオネット出演ー字幕つき演劇ーロン・ボワン劇場(日程調整中)ーパリ

le pôle.

les **de**chargeurs.
le **p**ôle.^{fr}

lee fou messica & ludovic michel

3, rue des dechargeurs

75001 paris

leefou@lesdechargeurs.fr

lmichel.lepole@gmail.com

+33 (1) 42 36 70 56

skype : lmichel.lepole